

粹な感覚が幻想からまぬがれているとき、そのときこそ、その固有の機能をはたすことができるようにそれらを訓練しなければならないのだ。そのときにこそ、事物がわたしたちにたいしてもっている感覚的な関係を知ることを学ばなければならないのだ。人間の悟性にはいつてくるすべてのものは、感覚を通してはいつてくるのだから、人間の最初の理性は感覚的な理性だ。それが知的な理性の基礎になっているのだ。わたしたちがついて学ぶ最初の哲学の先生は、わたしたちの足、わたしたちの手、わたしたちの目なのだ。そういうもののかわりに書物をもってくることは、わたしたちに推論を教えることにはならない。それは他人の理性をもちいることを教える。たくさんのかを信じさせるが、いつまでたっても、なに一つ知ることを教えない²²⁾と。要するに体を鍛えながら同時に感覚を磨いていくこと、それだけがこの時期の子どもにもっともふさわしい過ごし方だ、ということであろう。

b. 感覚の訓練と共通感覚の教育

しかし感覚を磨くということは、ただそれを使用するという意味するだけではない。ルソーによればそれは感覚によって正しく判断することを学ぶことを意味している。それはいわば感じ方を学ぶことであって、われわれは学習したようにしか、ものに触れたり、見たり、聞いたりすることはできないからなのである。もっとも、一方では、こうした判断とはなんの関係ももたず、純然たる身体的な運動のように見えるものもあるであろう。泳ぐこと、走ること、飛び跳ねること、ものを投げるなどがいちおうそうであるといえるかもしれない。しかしわれわれがたんに腕や足を動かしているにすぎないように見えるときでもじっさいには目や耳も同時に働かせてはいないであろうか。ルソーは言う、「だから、力だけを訓練してはいけない。力を指導するすべての感官を訓練するのだ。それぞれの感官をできるだけよく利用するのだ。それから、一つの感官の印象をほかの感官によってしらべるがいい。大きさは

かったり、数をかぞえたり、重さをはかったり、くらべてみたりするがいい。どの程度の抵抗を示すか推定したあとでなければ力をもちいないようにするがいい。結果を推定することがいつも手段をもちいることに先だつようにするがいい。不十分な、あるいはよけいな力をけっしてもちいないように子どもに関心をもたせるがいい。そういうふうに分が行うあらゆる運動の結果を予見し、経験によって誤りを正す習慣を子どもにつけさせれば、行動すればするほどますます正確になってくることは明らかではないか²³⁾と。複数の感覚に導かれながら試行と錯誤を通して無駄のない的確な体の用い方を学習していくこと、これが重要な点なのである。

ところでこのようにいくつかの感覚が組み合わせられ、相互によく調整されて、事物の性質をその事物のあらゆる外面的な様相の総合によってわれわれに教えてくれるようになるとそこにこれまでになかったようなあらたな感覚の次元が開かれてくる。ルソーのいわゆる第六感 (le sixième sens)、ないし共通感覚 (le sens commun) の成立である²⁴⁾。この感覚は特定の器官をもたず脳においてのみ存在しうる純粋に内部的な感覚であるが、それはつうじょう、知覚ないし観念と呼ばれているものにほかならない。そしてルソーによればこのような感覚の成立をまっしてはじめてその後の子どもの知識の基礎がかたちづくられたことになるのだ。なぜなら感覚でとらえられたかぎりの事物のすがたがそのまま意識にうつしだされるだけではいまだ対象のたんなる受容としてのイメージ (des images) にすぎず、まだ他のイメージとの関係をなんらもってはいないのにたいし、複数の感覚の総合としての観念 (des idées) はそもそもそのような総合を可能にするわれわれの側の一定の能動性をすでに前提しているし、またいったん観念が成立するとそれは必然的に他の観念と関係づけられるべきものとしてあたえられることになるからである。われわれは「思い浮かべているときは見ているにすぎない。理解しているときはくらべているのだ」(Quand on imagine

22) Ibid., pp. 369-370

23) Ibid., p. 380

24) Ibid., p. 417